

# 入学後の学生の意識変化に関する一考察

～自己効力感との関係を通して～

## A Study on Changes in Students' Consciousness after Enrollment through the relationship with self-efficacy

東北福祉大学教育学部

菅 原 敏 彦

Toshihiko Sugawara

キーワード：「自己効力感」「意識変化」「傷のあるリンゴ」

### 要 約

生徒指導・進路指導論では、外山滋比古著「傷のあるリンゴ」を読んだレポートを課題としている。「傷のあるリンゴ」には、「試験に落ちて進路変更を余儀なくされたような人が、悪戦苦闘、傷だらけになって走る人生マラソンのゴールはおどろくほど見事である。失敗は幸運の女神の化身であると考えの人がすくないのは不思議である。傷のあった方がうまいのはリンゴにかぎらない。われわれは不幸、失敗の足りないことをこそおそれるべきである。傷ついてうまくなったリンゴの教訓は貴重である。」という表現があるように、失敗に対する考え方が記されている。学生は、この文章から自らの失敗を振り返って、自分なりの考え方を述べる。自らの大学入試を振り返って記すレポートが多く、福祉大を第一志望とする学生は半数ほどで、しかも、入試は自分の思うとおりにできなかったという学生の割合も高い。その様な中で、入学後の学生の意識は大きく変わり、福祉大に入学して良かったと答える学生の割合は9割以上に上っている。このような学生の変化に焦点を当てながら、「自己効力感」とのかかわりについて論ずる。

### 1 はじめに

本論のテーマである「入学後の学生の意識変化」に関して興味を持つようになった理由を三つ述べる。

第一は担当する講義やゼミでの学生とのかかわりで、大学入試や入学後の大学生活に関する話題となり、次のようなことを考える機会が、年を追う毎に増えてきたからである。

- (1) 学生がどのような動機で本学に入学するに至ったのか
- (2) 福祉大学を第一志望として入学してきた学生は、どれぐらいの割合だろうか
- (3) 福祉大学での学びが現在の生活に役立っているのだろうか

(4) 学生が夢中になって、努力をしているものはあるのだろうか

(5) 福祉大学に入学してよかったと思っているのだろうか

このようなことを考えるに至った経緯としては、他にもある。生徒指導・進路指導論の講義やゼミで、外山滋比古著「傷のあるりんご」を読んで、感想等を1200字程度にまとめて提出するという課題を課している。そのレポートには、大学受験における失敗談や現在の大学生活にかかわる内容が記されることが多く、福祉大に入学した学生の気持ちの一端を知ることができる。このような機会から、担当している学生の気持ちの変化や大学生としての学びの変容を教員が理解し、それぞれの学生が目指す進路に対してのサポートや今現在の学生生活に対する精神的な支援を行う必要性を実感している。ただし、サポートや支援には、適切なアセスメントが必要である。学生自身が多くの体験から学び、それを意味づけることによって経験となり、自らの目標を達成するための過程において、失敗を生かせるような学びの場が必要である。

第二に、昨今、学生同士の会話や生活の様子をみると、趣味や好きなことに時間を割けない学生が増えていることを実感するからである。大学生活では、受験から解放され、学生自身が好きなことをやり、自由に生活できるようになり、モラトリアムの中で、自分なりの生活スタイルや思考、判断、表現などの方法を身に付けていく。このことが大学生生活の醍醐味であり、大学が存在する理由でもある。最近、多様性（ダイバーシティ）という言葉が頻繁に目にする。人間が様々な人、もの、事象と出会い、様々な考え方や価値観に触れ、自らの言動を振り返りながら、自らの考え方や価値観を広げ、深めて、より多くの人、もの、事象を理解する。この流れを基本に据えて、より豊かな人生を目指すためには、自由度の高い学生時代に、多様な価値観、考え方に触れることが極めて重要である。

しかし、かつてと比べると講義への出席状況も厳しく管理され、しかも、夕方遅くまで講義が続く中で、自由な時間が少なくなっている。学生自身が自らの趣味や好きなことに取り組む様子が非常に少ないと言える。経済成長が止まり、学費の工面のためのアルバイト、コロナ禍における行動自粛など、様々な課題も学生生活の自由度を奪っている要因であろう。

このようなコロナ渦で、学生は何を大切にしながら生活しているかについても調査してみると、興味深い結果となった。

第三に、学生生活から考えられる「自己効力感」の問題について考察したいと考えたからである。自己効力感とは、スタンフォード大学のアルバート・バンデューラによって提唱された概念であり、英語では「Self-efficacy」と表現される。自己効力感とは、目標を達成するための能力を自らが持っていることを指す。簡単にいえば、「自分ならできる」「きっとうまくいく」と思える認知状態のことである。

生徒指導・進路指導論を履修する学生へのアンケートで、福祉大学に第一志望で入った学生の割合が約55%、大学受験は思い通りにすることができたという割合が約60%程度にもかかわらず、大学での学びが役に立っている、入学してよかった、福祉大で正直に話せ

る人がいるという割合がかなり高くなっている。

このような状況から考えられることは、大学生活の中で、多くの学生が失敗経験や自らの体験から、自分ができることを広げ、「自己効力感」を高めているのではないかということが予想される。同時に、福祉大学の教職員が、学生の自己効力感を高めるために、何らかの作用をしていると考えられる。

## 2 「傷のあるりんご」のレポートから

この文章を学生に読んでほしいと思った動機は、毎週ゼミ生との話し合いやプレゼンテーションを通して、教員を目指すために本学に入学してきた学生が、入学当初は、挫折感を味わい、入試に失敗したという思いが強いということを感じたからである。さらには、「失敗は、その後の人生にとって大切なものである」というメッセージを学生に送りたいという気持ちもあった。

このような実態を把握するために生徒指導・進路指導論を履修する学生（104名 回収率78%）に進路に関するアンケート調査を行った。その一部は表1のようにになっている。福祉大学を第一志望としない学生が約46%であるが、入学後の満足度はかなり高くなっている。

質問番号	質問項目	はい (人数)	いいえ (人数)	はい (%)	いいえ (%)
1	東北福祉大学は第一志望でしたか？	44	37	54%	46%
2	大学受験は、自分の思うとおりにできましたか？	50	31	62%	38%
5	東北福祉大学に入学して学んできたことは、現在の生活にとても役だっていますか？	79	2	98%	2%
10	教員採用試験は受験しますか？	45	35	56%	43%
12	東北福祉大学に入学してよかったと思いますか？	76	5	94%	6%
14	東北福祉大学に入学して、自分の正直な気持ちを話せる人（友人・先生・家族など）はいましたか？	77	3	95%	4%
17	コロナ禍になり、自分の学びに変化がありましたか？	53	28	65%	35%

表1

次のレポートは、入学後の満足度を、自らの体験とエピソードを交えて記している。

（学生A）

私は第一志望の大学に合格することができず、東北福祉大学に入学することになりました。入学当初はうまくやっていけるか不安でしたが、今となってはたくさんの人に支えられ、大学生活に満足しています。思い描いていた進路ではありませんでしたが、様々なことを考える機会を得ることができ、結局はこれで良かったと思っています。その意味において、次につなげることができたのだと振り返っています。「傷のあるりんご」を読んで、「罪を犯した者が警察官になるべきである」という逆説的な話を思い出しました。一度罪を犯した者は、犯罪者の気持ちを理解することができ、正義を振りかざすだけではなく、寄り添うことがで

きるという内容でした。「傷のある人間」は優しさを兼ね備えているということを示唆していると思います。映画「男はつらいよ」の寅さんにも当てはめて考えることもできると思います。15歳で家出をし、日銭暮らしの日々の中でたくさんの失敗を重ねて故郷の柴又に帰る寅さんは、柴又に活気を与え、あたたかい空気に包み込みます。寅さんは決して褒められたような生き方をしてはいませんが、ユーモアに溢れ、優しく、加えて多くの人に勇気や希望を与えるインフルエンサーなのです。このように「傷のある人間」は多くの人にとってかけがえのない存在であることが分かります。「傷のあるりんご」を読み、講義の中で紹介された「大学生活は長い夏休みである」という言葉の意味を改めて噛みしめることができました。大学生活ではたくさん学び、たくさん遊び、たくさんの経験を積み、自分にたくさんの「傷」をつけて真の意味で「味のある人間」になれるように頑張りたいと思います。

次のレポートも、入学後の自分の意識変化と大学生活の満足度を記している。

(学生B)

傷のあるりんごを読み、共感した箇所があると同時に考えさせられる点が多くあった。

私は不幸や失敗の経験を大切にすることを心がけている。そのため、試験を例に挙げていた文章の一部に大変共感した。私自身、大学受験に失敗したのだが今となればこの大学に入学して良かったと心から思うことができている。また、大学に入ってから良い意味で変わったと周囲の人から言われることも多くなった。センター試験で良い成績が取れず、希望した大学をあきらめざるを得ない状況になった時は精神的にかなり参ってしまった。だが、文章にもあった通りその後すぐに切り替えて他の勉強に励んだ。推薦入試で合格した人が遊んでいる中ひたすら英単語帳を開き勉強した。その結果福祉大には入学することができ、1年の頃にあった選抜試験にも無事合格することができた。そしてこの大学でたくさんの出会いがあり、自分の人生の中で大切な時間を過ごしているように感じる。この経験があつてから私はまずは行動し、失敗をしてみるということに怖さをあまり感じなくなり、むしろわくわくしていた。そのため、この文章に共感する点が多くあった。(後略)

(学生A)(学生B)の二つのレポートからは、学生の気持ちの変容等を中心に、心の変化、学びの変化について知ることができる。東北福祉大学への入学を肯定的に捉えていることも共通点である。

次のレポートからは、失敗に対する考え方が、変容した様子が窺われる。

(学生C)

私はこれまで極力失敗はしない方がよいという考えであつた。失敗することは恥ずかしく、失敗してしまうということは他人よりも劣っているのではないかと考えてしまってい

た。何か練習をするという場面でも、失敗しないように、失敗してはいけいと完璧を求めている。だが、「傷のあるりんご」を読み、失敗に対する見かたや考え方が変化した。その変化した点を以下に述べる。

これまでは失敗を恐れ完璧を求めているが、本当に大切なことは、失敗をし、その失敗から何を学ぶかであると今回の文章を読み感じた。私は練習から完璧でなくてはならないと失敗を恐れていたが、それでは練習の意味がないことに気づかされた。成功した経験よりも失敗した経験の方がよく記憶に残る。だからこそ、練習では失敗を恐れずに多くのことにチャレンジし、たとえ失敗したとしてもその失敗から原因を考え、次に繋げるというサイクルが自分自身の成長になると考えた。加えて、多くのことに挑戦し失敗するということが簡単にできるのは学校に通っている期間であると思う。どうしても、社会人になってからでは仕事の責任などもあり、簡単に失敗するということはできなくなってしまう。すなわち、挑戦し失敗するということは、生徒や学生の時にしか経験することができず、私は今、かけがえない時間を過ごしているのだと私の中の失敗に対する捉え方が変化した。

また、「傷のあるりんご」を通して、失敗は自分を次のステップへと成長させてくれるものなのだと考えるようになった。私は大学受験の際に試験不合格になることを恐れ、模試で判定が良く、確実に合格する大学へと進路を決めた。私は不合格になることから逃げたのだ。しかし、友人は不合格を恐れず当初からの志望校を受験した。この友人は現役合格とはならなかったが、1年の浪人生活を経て翌年合格した。現在もこの友人とは頻繁に交流があるが、浪人生活をしたためか、物事の考え方や人との付き合い方など一皮むけたように感じる。これが、失敗が人を強くし成長させるということなのかもしれないと「傷のあるりんご」を読んだ際に感じた。

次のレポートも、「傷のあるりんご」を読んで、考え方が変わった学生のものであるが、自らの受験の失敗による挫折感が強く、心の整理がつくまでに時間がかかった例である。

(学生D)

この話を読んで少し自分の考え方が変わった気がする。失敗は悪いものではない、失敗することによってそこからまた這い上がろうとして人間的に成長することが出来る。成功によって富や名誉など得られるものはたくさんあるが、成功した人はそこで満足して努力を怠ってしまうことが多い。だが、失敗した人は同じ失敗を繰り返さないように、次こそはという気持ちで努力をする。その過程にこそ意味があると思う。失敗したことによる痛みや苦しさを知っているからこそ、それをバネに頑張ることが出来るし負けそうになった時の原動力にもなり得る。そして、自分だけでなく周りに同じような状況の人がいたときに親身になってよりそうことが出来る。大学受験に落ち、何も考えられず自分のやってきたことは無意味だったのか頑張れていなかったのかと自分を責め、人生終わったとまで思っていた。目標を達成出来なかったこと、親の期待に応えられなかったこと、そんな自分が許せなくて憎

かった。ただ、心の整理が出来た今はきっとあの経験も自分の人生で何かしら意味のあるものになると思っている。あの経験があったから今の自分がいると思えるくらいに強い人間になりたいと思ったし、あのときの悔しさとか苦しさを決して忘れてはいけないとこの話を読んで思った。成功ばかりの人生でないとしても、何回転んでつまずいたとしても諦めたくない。立ち止まったとしても、前に進むことを諦めたくない。悔しいことがたくさんあっても、最後には良かったと思えるような人生にしたい。

次のレポートは、現代社会における「失敗」に対する考え方や社会の理想像などと照らし合わせながら、自分の生き方や考え方を記したものである。

(学生E)

傷のあるリングを読み、無意識のうちに社会において「理想」とされている在り方に倣って生きていたことに対して明確に疑問を抱いたのと同時に、幼少期からの悩みであった自己存在感の低さと向き合う方法を僅かながら見出すことができた。

文中にある通り、現代社会では出来る限りこうあるべきという指針がある程度用意されており、大半の人が学生時代から人間としてあるべき姿に倣うよう促され、それに疑問を抱くことなく進んでいる。私も間違いなくその一人で、周囲が向かう方向と同様に、後ろ指をさされることの無いように歩んできた。指標に倣うことは思考を放棄しているわけではないし、努力を要する場面も十分にある。良い方向に捉えれば、社会の一員として我が国に貢献するという明確な意思表示で、社会全体からは非常に評価されることも重々承知している。しかしそんな自分自身を客観視すると、中身が無く薄っぺらな思考が目立ち、内面が未熟であることを痛感し、今のままではよくないのではないかという気持ちが勝る。トライアンドエラーを繰り返す過程で、豊かな思考力や生き抜く力、問題解決能力、広い視野が形成されていくのだろう。自分には内面の成長や自己存在感の醸成に必要な経験が不足していたと気づかされた。

だが、残念なことに現代社会は失敗に対してあまり寛容ではなく、経歴についてしまった傷を払拭するのは容易なことではない。私と同様に失敗を避け、誰かが引いた安全策の上を歩んできた人は大勢いるし、これからもそうやって生きていく人が大勢いるだろう。その生き方を否定せずに内面の成長を図るために、成人までの大半を過ごす学校教育にできることは、挑戦と失敗、そして成功を体験する機会の提供なのではないだろうか。学校の中だけでも、失敗を受容し解決策と一緒に模索できる環境や欠点を認めてくれる大人の存在があれば、児童生徒はその経験を糧として生きていくことができるのではないだろうか。学校は児童生徒の意見が反映されやすい環境でもある。思いつきでも何でも、児童生徒の好奇心や興味、「やってみたい」に手を差し伸べることができる絶好の場所である。非常に主観的かつ自己中心的になってしまうが、私はこれから私自身の挑戦として、生徒と一緒にこの失敗・成功を重ねていける教員を目指したい。時に上司に、あるいは保護者に、生徒に否定的

な意見をぶつけられるかもしれない。しかし、たった一人でも、この激動の社会を生きていく子どもたちの成長に貢献できたならば、その先で自分自身の存在を認められるのならば、その覚悟をもって教師の夢を追いかけ、教員採用試験に向けてさらに励んでいきたい。

このレポートでは、無意識のうちに社会において理想とされている生き方や考え方に倣って生きてきた自分を深く見つめ、自分には内面の成長や自己存在感の醸成に必要な経験が不足していると振り返っている姿がある。

失敗に対して寛容ではないと感じる現代社会において、挑戦と失敗、成功を体験する機会の提供とそれらを認める大人の存在を指摘している。

次のレポートには、過度に傷つきすぎた場合を想定して記している。

(学生F)

(前略)ただ、私は過度に傷のあるリングを求める社会にはなあって欲しくない。そのため筆者の『われわれは不幸、失敗の足りないことを恐れるべきである』には同意し兼ねる。たしかに、不幸や失敗は人を成長させるしリングも美味しくさせる。しかし、過度に傷つき過ぎた場合そこには何が残るのだろうか。傷つき腐りぐちゃぐちゃになったリングは誰が食べるのか。肝心の食べる人が居なくなっては美味しい、美味しくない以前の問題である。人も同じだ。過度に傷を受けた場合、その人は果たして真っ直ぐ前を向いて歩けなくなってしまうのではないだろうか。また、失敗という心の痛手を受け、それを癒す努力は本当に自然であるのか。壁につき当たったら、乗り越えようとするのが人間であるのか。そこでへなへなと、くじけてしまうようなら、いくら幸運に出遭っても、それを生かすことができないという主張は本当に正しいのか。私は疑問を呈したい。

このレポートでは、なかなか立ち直ることのできない現実の社会で、どのようにすればいいかという問題提起を行っている。

次のレポートでは、人に頼ることをしなかった自分が、今では、自分の非を認め、自分の弱点をさらけ出すことができるようになったと記している。

(学生G)

「人間でも、きれいで、非の打ちどころのないのより、ちょっと、欠けたところのある方が、いいように感じられる」というこの言葉に私は心を打たれた。私は自分ができることでダメだしをされることが嫌で、完璧を求めてしまうところがある。欠点を見せることは恥ずかしいし、完璧ならば人に必要とされ、人間関係で悩んだりしない。そう思って生きてきたけれど、そんなことはないんだなと思い知らされた。いろんなことで悩み、落ち込んだり、イライラしたりと情緒が安定しない。そんなとき、今までの私だったら、人に涙を見せることや、相談や人に話を聞いてもらうことは、自分が追い込まれるまでしなかった。だが、人

に頼ることを学び、そのおかげで、追い込まれることはなくなった。人を頼るということは、自分の非を認め、自分の弱点をさらけ出すということ。昔の私だったら絶対にしないことを、今の私ができているということは大きな進歩だと感じる。欠けたところ＝弱点がある、これを人間味があるというのだろうか。人間味があるから、人に好かれるということなのだろうか。私はまだ、人の弱点が他人に好かれるとは思わないが、弱点があることは恥ずかしいことではないのは自分の経験をもとに学べた。途中に出てくる「人間としては、やはり、無傷、欠点のないのが喜ばれる」という言葉は、私の考え方に似ている気がする。綺麗で、何色にも染まっていない人間の方が成長の兆しが見えたり、自分色に染めることができる。赤ちゃんを例にあげると親の育て方次第で、素直で優しい子になるか、ひねくれた無口な子になるか、どう成長するかは様々だが性格は変わってくる。そして、赤ちゃんが好まれるのも純粋で綺麗だからではないのだろうか。だが違う視点から見ると、綺麗なものが嫌われたりすることもある。世間的には素直なところが純粋と言われ、それが長所として好まれる傾向があるが、素直すぎるのも周りに敵を作ってしまう。素直すぎて相手に嫌な思いをさせてしまったり、ウザがられてしまったりということもある。結局、価値観の違いと片付けてしまえば簡単なのだろうが、そうは言っていられない。人間は一人では生きていけないため、誰かの助けが必要だ。そのため、価値観が違うからこそ受容も大事だし、疲れるが偽って生きていかなければならない。「失敗という心の痛手を受ければ、それを癒す努力は自然である。壁につき当たったら、乗り越えようとするのが人間である。そこでへなへなど、くじけてしまうようなら、いくら幸運に出遭っても、それを生かすことができない。」とあるが、その通りだ。悩み続けていても、行動しなければ根本的な問題の解決はできないままだ。そして成長もできない。失敗があり、不幸があるから、人はそれをどうにかしようとして学び、人として成長していく。まさに「われわれは不幸、失敗の足りないことをこそおそれるべきである」と作者が言っていることが正しい。私自身もそうやって、いろいろな壁を乗り越えてきた。その度に人生に疲れやめてしまいたくなかったが、こうやって人として成長ができ、親や身近な人に褒めてもらえるようになった。「失敗は成功のもと」というように、乗り越えた先にきっといいことがあると信じて、突き進んでいこうと思う。

次のレポートは、人との出会いから得たものを自分の生活と照らし合わせ、これからの自分の生き方に生かそうとするものである。

(学生H)

なぜ人は「完璧」を求めるのだろうか。できるだけきれいなものもいいし、欠点がないような人に憧れ自分の未熟さを恥じ「ああなりたい」と目指す。なぜ完璧が良しとされてしまうのだろうか、完璧とはどんな状態なのかを考えさせられた。

私は本当の完璧は完ぺきを目指して試行錯誤している状態のことを指すと思う。その過程で得た失敗や傷は勲章である。自分が目指すもの、目指すものがなくても自分の生き方を



持ちまっすぐに進んでいる人が本当にかっこいい。私はある会社の飲食店でアルバイトをしている。人が少ないから社長も毎日働いている。社長と一緒に働ける貴重な機会だと思いアルバイトをすることを決めた。その社長は本当に人としてかっこいい。社長は若いころずっとアジアを旅していたそうだ。言葉が通じない文化も違うそんな地で人生を学んだと私に語ってくれる。そのアジアの旅で得た経験は平凡な暮らしを送っていては決して得ることのできないものだったと思う。そんな豊富な経験をしている社長の人柄に魅了され店に来てくださる常連さんも数多くいる。その常連さんたちもすごく素敵な人ばかりだ。「ピンチを楽しめる人になれ」と社長が私に言ってくれたことがある。それは傷つくことを恐れず挑戦し、自分が成長できるチャンスだと意気込んで乗り越えろということだと思った。その精神でチャレンジできたことが多くある。そしてもっと成長したいと思い、決めた目標もある。こうして自分の目標に貪欲にチャレンジすることで失敗やピンチを楽しんで向き合い乗り越えることの素晴らしさをこの「傷のあるりんご」を読んで再確認できた。

プライドが高い人ほど失敗すると言いつけをする。失敗を失敗と認めない。これでは人間は成長しない。なぜなら自分に甘いからだ。時には自分を追い詰めず自分を慰める時もある必要だ。しかし成功には偶然があるが失敗には偶然はない。失敗には必ず原因がある。その原因を自分なりに分析しそこから学びまたチャレンジする人が得るものは非常に大きい。壁に当たって砕けてその事実を受け入れ、考え学んで行動すると人は必ず強くなる。

自分が教員となって指導する際には失敗を教えたい。成功や答えは失敗や間違いを学んだ方がよくわかる気がする。失敗は人間性を豊かにする。人間性が豊かだと人生は何倍も面白くなるだろう。気が付かないことにも気が付けるように、わからなかった人の思いも想像できる。自分の目標に向かって失敗をも糧にするそんな人間としての強さを指導したいと思った。そうすることで相手の頑張りにも気が付けるようになると思う。学習指導要領に掲げられた指導内容だけでなく、人生の先輩として生徒たちと関わる時間も設け、人間性や人格の形成に良い影響を与えられるような指導も大切にしていきたい。

次のレポートは、失敗に対する考え方を深く考察し、異なる観点から記したものである。

(学生Ⅰ)

社会が求めている人間になろうとすると、平凡な人間になる。今、個性やその人らしさというものが重視されているが、それは、「社会一般的に好ましい」という条件付きのものである。だからみな、社会に通用する受けの良いその人らしさを伸ばそうとする。就活でよく目にする長所・短所の分析もその具体的エピソードも、社会に受けの良いきれいなものである。そのようなプロフィールにその人らしさはあるのだろうか。

かくいう私も、自分が面接官になった場合、やはりきれいなプロフィールの学生を採用したいと思うだろう。会社側は、変わった個性を持つ予測不能な新入社員を採用するよりは、今まで通り平凡な優等生を採用した方が、リスクが小さいと思うのではないだろうか。

社会全体が失敗した企業や有名人を叩いて再起不能にする風潮がある今、みなが傷を恐れてしまうのは当然のことに思う。人が傷を負って成長したいと思うためには、社会全体が傷や失敗をもっと前向きに捉えることが必要ではないだろうか。

世の中では社会一般に好まれる個性やその人らしさが求められているが、これは失敗についても同じではないだろうか。部活で敗退した、チャレンジしたが実現できなかった、世の中で語られている失敗エピソードは、その先に成功があるきれいな失敗である。失敗から立ち直ることのできなかったエピソードは全く好まれない。傷にもまた、「社会一般的に好ましい」という条件が付けられているのではないだろうか。

就活や教員採用試験の面接は、それこそ失敗できない場所である。みな、失敗を恐れて本気で取り組んでいるのである。失敗は糧となる、人間的に成長できるというのは、失敗を乗り越え成長できた人たちの結果論ではないだろうか。失敗こそ必要だというのは、成功した人が自らの過去を振り返ったときに初めて気づくものであって、今から勝負をする人に、失敗しても大丈夫、むしろ失敗は必要なことだと言っても良いのだろうか。「失敗したらどうしよう」「これで自分の人生が決まってしまうのだ」という恐怖と闘いながら精一杯努力し、成功を掴もうとした結果の失敗でなければ、それを成長につなげるのは難しいのではないだろうか。

しかし、どんなに精一杯努力しても失敗する人は必ずいる。その失敗を失敗のまま終わらせてしまう原因は、「成功」と「失敗」を対極のものと捉えているからではないだろうか。『人生における失敗者は、諦めたときにどれだけ成功に近づいていたかに気付かなかった人たちである。』とトーマス・エジソンが言うように、失敗は成功までのプロセスであり、この二つは直線でつながっていると捉えることが必要なのである。たとえ失敗したとしても、マイナスにはならずむしろプラスになって成功へと着実に進んでいるのだと考えることができれば、失敗を失敗のまま終わらせずにすむのである。

また、成功も失敗も本人の捉え方次第なのではないだろうかと考える。私は高校受験で志望校に合格することができ、受験に成功したともいえるが、今はその高校に進んだことを少し後悔している。仮に入試に落ちてしまっていたとして、別の高校に入学しそこで充実した日々を送ることができたのなら、それは受験に成功したことになるのかもしれない。社会一般での成功・失敗と、個人の考える成功・失敗は違う。成功も失敗も、等しくただの経験であり、そこにどんな意味付けをするかは私たちに委ねられている。もう二度と失敗したくないといって挑戦をやめるか、確実に成功に近づいているのだと挑戦し続けるか、経験の先の行動は、私たちがどのように受け止めるかにかかっている。きれいなプロフィールにならなくとも、自分の中の成功と失敗を重ねて生きていけばよいのではないだろうか。人間的に成長したかどうかということは、他人に計られることではない。過去の自分の振り返ったとき、その経験から着実に前へ進んでいるのだと自分で成長を感じることができればよいのではないだろうか。

次のレポートは、これまでの自らの考え方を振り返り、「こうありたい」という強い意志を記したものである。

(学生 J)

(前略) 私は、能力の高い人を見ると羨ましくなって自分に失望することがたびたびある。相手を尊敬し評価する一方、同時に「それに比べて私は…」と、ネガティブな評価を下してしまう。いつも私は、他人と比較してできない自分に対して落ち込んでばかりいて、特に努力をせずに諦めていたことに気づかされた。

リンゴは春に花が咲いてから収穫するまでのおよそ半年間、風雨にさらされ自然と闘いながら成長していく。その過程で、枝や葉の擦れなどで傷がついてしまうことがある。しかし、リンゴは傷がつくと、その傷を塞ごうとして自己回復力を発揮し、糖度を上げる。傷があると外観は良くないかもしれないが、味に対しての影響はなく普通の実よりも熟していて美味しいものの中にはある。私は、いつしか傷ついたり失敗したりすることを過度に恐れていた。私も、自分と他人を比較していないで、傷つき失敗しながらも努力する過程を大切に、リンゴのようにたくましく生きていきたい。自分をよく見せようとすることも、自分はダメだと卑屈になることもなく、一人の人間として堂々としていられるようにしたい。「傷付いたことのある人は、人の痛みがわかるようになる」とよくいわれるが、これもわかるようになるようにしたからこそわかるものである。わかろうとしなければ傷ついても人の傷には気づかないだろう。単純だが、見失いがちな視点である。これは、「人の気持ちが分かることが分かっていること」に通ずるところがあるのではないだろうか。教育現場である学校で児童生徒にこの力を身に付けさせるためには、まずは教師が、児童生徒がどんな気持ちでいるのか、何を願い、どんなことに悩んでいるのかと心の状態に絶えず関心を寄せ親身になって支えていく姿勢を見せなければならないと思う。児童生徒は、自分の気持ちのわかってくれる教師を何よりも求めている。私達は、常識や、教材内容を物差しにして、例えば、進んであいさつする・しない子、分数のわかる子・わからない子と言うように児童生徒を外側から測定して、その子を理解したと思っていることはないだろうか。このような見方では、児童生徒の心の内は理解しづらいものである。教師が自分でもできそうもないことを児童生徒に要求し、指示や命令だけで彼らを動かそうとしても、児童生徒はついてこないだろう。児童生徒が示す欠点や人間的弱さを教師が自分自身の中に見出し、それらを児童生徒と共に克服しようとし、「傷は成長の糧となる」と教えられる教師になりたいと思った。

以上のようなレポート並びにアンケート結果などから、学生の意識や考え方、価値観の変化について知ることができる。東北福祉大に入学しての満足度が高いということが、アンケート結果や学生のレポートの「大学受験に失敗したのだが、今となればこの大学に入学してよかったと心から思う」「私は今、かけがえのない時間を過ごしているのだ、私の中の失敗に対する捉え方が変化した」というような表現からも垣間見ることができる。

(学生E)のレポートのように、無意識のうちに社会において「理想とされている在り方に倣って生きてきたことに対する疑問、自己存在感の低さに気付くとともに、失敗に対して社会は寛容ではなく、経歴についた傷を払拭するのは容易ではない」と指摘する学生もいる。同時に、挑戦と失敗、成功を体験する機会の提供の重要性、失敗を受容し解決策をともに模索できる環境の整備や大人の存在をすどく指摘している。

(学生G)は、社会全体が失敗した企業や有名人をたたいて再起不能にする風潮がある現代社会を、失敗を恐れてしまうのは当然であると指摘する。さらには、失敗が糧となり、人間的に成長できるというのは、後に成功した人が過去を振り返ったときにはじめて気付くものであり、これからいろいろなことにチャレンジする人にとっては、失敗という恐怖と戦いながら努力していると指摘する。「成功」と「失敗」を対極のものと捉えるのではなく、失敗は成功へ着実に進む過程であるとも述べている。

(学生J)は、児童生徒が示す欠点や人間的弱さを教師自身の中に見出し、それらを児童生徒とともに克服しようとする姿勢を大切にしたい教師を目指したいと自らの願いを語る。

外山滋比古著「傷のあるリンゴ」は、失敗に対する自らの考え方や社会がどのように捉えているかなどを深く考える教材となった。さらには、自らの今後の生き方や考え方・価値観に柔軟性を与え、幅を広げるという効果があったと考える。

### 3 「大切にしていること」や「大切にしていきたいこと」

最近の若者や学生は、車やバイクなどの乗り物への興味が薄いと同時に、スポーツ離れも指摘されている。学生が大切にしているものは何かを調べることによって、学生生活の状況の一端を知ることができるのではないかと考え、表2のような質問項目を設けた。

質問 番号	質問項目		人との つながり	家族	時間	自分ら しさ	余暇・ 趣味	コミュ ニケー ション 能力な ど
19	これから社会に出て、いろいろなこと（仕事など）をやりながら生きていく上で、何を大切に生きていきますか？	人数	28	0	2	13	2	11
		割合	35%	0%	2%	16%	2%	14%
20	今、自分が最も大切にしていること（もの）は何ですか？	人数	14	13	11	6	9	2
		割合	17%	16%	14%	7%	11%	2%

表2

表2をグラフ化したものが図1である。

「大切にしていきたいもの」としては「人とのつながり」が多く、「自分らしさ」「コミュニケーション能力など」も挙げられている。

「自分が大切にしているもの」についても、「人とのつながり」の割合が高い。「家族」「時間」を大切にしていると答えた学生も比較的多い。

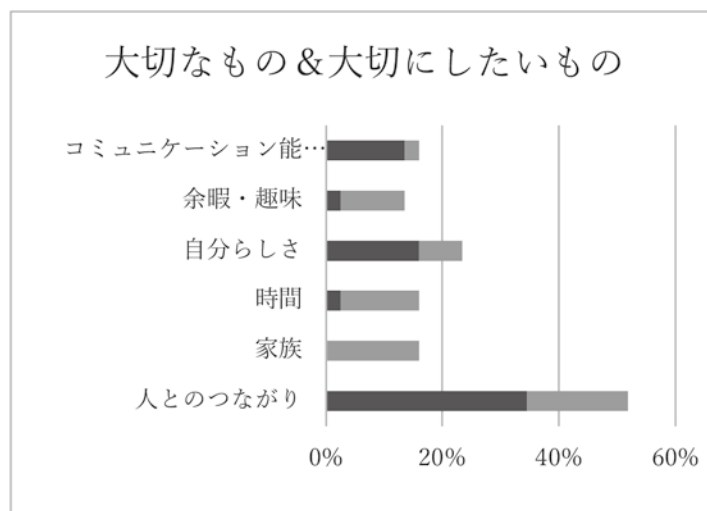


図 1

このような結果から、学生は「人とのつながり」「人間関係づくり」を大切にする傾向が強いということが言える。その裏には、社会に出て同僚や上司との関係をうまくやっていけるかどうかという不安が隠されている。

「自分らしさ」「自分の感じ方」「自分の気持ちに正直になること」「自分を大切にすること」「自分のやりたいこと」などを大切にしたいという表現も見られた。「人とのかかわり」を大切にする一方で、自分らしさを失いたくないという気持ちの現れでもある。

#### 4 東北福祉大への満足度

先の表 1 に見られるように、「東北福祉大学に入学してよかった」と答えた学生は、約 94% にのぼる。「東北福祉大学に入学して、自分の正直な気持ちを話せる人はいるか」という質問に対しては、約 95% の学生がいると答えている。

このような結果から、入学後の学生生活における満足度はかなり高い割合となっていることがうかがわれる。

「後輩や高校生に東北福祉大学のよさは何かと聞かれたら、どんなことを話すか」という質問に対しては、以下のような回答が多く見られた。

「友人や先生が優しい」(約 25%)

「教育学部や先生方のサポートが充実している」(約 20%)

「特別支援教育が充実している」(約 10%)

「先生と学生との距離が近い」という表現にも象徴されるように、教育学部の学生は、友人や教員によるサポート体制の充実で満足している状況が見られる。特別支援教育に対する満足度も高く、大いに期待している様子もうかがわれる。このような結果から、教員を養成する大学として、これまで以上に魅力ある講義とゼミの運営の充実が求められるものと考えられる。

表 1 にあるように、学生の半数以上は「東北福祉大学が第一志望ではなく、大学受験は思

うようにできなかった」と答えているのに対して、入学後の満足度はかなり高くなっている。

学生の多くは、東北福祉大学での学生生活において、教員採用試験や就職活動等において、結果を出すための適切な行動を選択し、かつ遂行するための能力を高めるための努力を重ね、自己効力感を持てるようになっていくことがわかる。ある意味「自信」が持てるようになったことがわかる。

自己効力感とは、社会的認知理論の中で使用される心理学用語で、アルバート・バンデューラによって提唱されている。「自分は困難を克服できる」「自分は現状を変えることができる」と信じるようになれば、失敗や壁、困難や難問にぶつかっても、挑戦する、(失敗しても)比較的早く立ち直る、という傾向にあることがわかるというものである。

「傷のあるリンゴ」のレポートやアンケートの記述からも、第一希望を実現できずに自信を失っている学生が、東北福祉大学での学生生活を通して、考え方や価値観が変わり、友人や教員からのサポートを感じ取りながら、次第に自己効力感を高め、自信が持てるようになっていくと考えられる。

このことは、「大学での学びで一番大切なことは何だと思いますか」という質問に対する結果にも表れていると考えられる。多くの学生が「主体性」「自主性」を挙げているのである。つまり、自分でやりたいことや学びたいことを見つけ、主体的に学ぶことによって、大学生活が充実していくことを指摘している。具体的には、次のような記述が見られる。

「自分の学びたいことを追究すること」

「興味あることを見つけること」

「自分のやりたいことについて理解を深め、適性を確かめること」

「主体的に学びに向かう姿勢」

「挑戦してみること」

「様々な本を読み、視野を広げる」

「学びを自分のものにしようとする熱意」

「広い人間関係を築きつつ頼れる人を作ること」

「自分の視野を広げる学びをすること」

このような記述から、多くの学生は、入学時よりも積極的に物事や人とかかわり、自らの興味・関心に基づいて主体的に学んでいると考えられる。このような学生の意識や姿勢の変化が、東北福祉大学への入学を肯定的に捉えていることにつながっているものと考えられる。

## 5 今後の学生への指導・支援について

学生のレポートやアンケート結果、ゼミや講義での学生とのかかわりから常に感じることは、多くの学生は自ら目標を定めて、その目標に向かって努力しているということである。教育学部の学生の多くは、教員になりたいという意識が高く、1年次から開講される「教育実践活動」3年次からの「教育実習」等に積極的に取り組んでいる。

講義での課題やレポートへの取り組みや実習等における行動の決定においては、自分の責任において自己選択と自己決定を行うという側面で、不十分な学生もいる。この自己選択と自己決定は、生徒指導能力につながるものである。

これらの活動を通して、学生は失敗したり、感動したり、共感したり、つらい思いをしたりしながら、自らの目標に向けて努力を続けていく。自らの目標を変更する場合もある。いずれにしても、学生生活において、「やればできる」というような自己効力感を高めることによって、様々な実習や講義、演習等への取り組みがより積極的になり、結果を恐れずに過程を大切にしたい姿勢が身に付くのではないかと考える。

アルバート・バンデューラによる社会的学習理論では、自己効力感が高いほど物事の遂行能力が高いといわれている。自己効力感とは自然に生まれるものではなく、以下の4つが必要であるともいわれている。

#### ① 直接的達成経験

直接的達成経験とは、過去に自分自身が何かを達成、成功した経験のことである。

#### ② 代理経験

他者の体験を見本にして、自分でもできるかもしれないと思える経験のことである。代理経験によって自己効力感を高めるためには、「自分もできるかも」と思えることがゴールである。そのためには、すでに達成したことがある人の話を聞いたり、経験者のブログなどを読んだりなどの情報収集が大切である。

#### ③ 言語的説得

「自分ならできる」「あなたならできる」と思えるような言葉を他者からもらうことである。家族や友人に「あなたなら大丈夫」と励ましてもらうだけで自信が湧き、本当にできそうな気分になることがある。

言語的説得に関連して自己効力感を高めるためには、チャレンジに対して、否定ではなく、肯定して応援してくれるような仲間からの声をもらえる環境に身を置くことである。

#### ④ 生理的情緒的状态

生理的情緒的状态とは、「心身の状態を良好にすること」である。どんな人でも、体調が悪ければモチベーションは低下してしまう。健康的で規則正しい生活をして、自分の身体と心のコンディションを整えることが重要である。

以上の4つのほかに、江本（自己効力感の概念分析）によると、次のような要因が挙げられている。第1に、行動に対する意味づけや必要性である。何のために行うかという意味に価値を置いているほど自己効力感が高くなる。

第2に、達成するための方略があげられ、ある課題を達成するための方略を知っていて、それを活用できることが自己効力感を高める要素である。

第3に、物事の原因は何かを示す、原因の帰属があげられる。子どもが自分の成功や失敗を自分の能力の結果と考えるほうが、努力の結果と考えるより、自己効力感が高く保たれる。

第4に、ソーシャルサポートがあげられ、活用できるソーシャルサポートを多く認識して

いるほど、自己効力感が高められる。

第 5 に、 アルバート・バンデューラの理論の前提でもある認知能力があげられる。自己効力感には、過去や未来という時間を自分と関係づけることや、自分自身を振り返る反省といった能力を必要とする。

第 6 に健康状態があげられる。健康状態の良し悪しが自己効力感に影響を及ぼしていると考えられている。

アルバート・バンデューラが説く 4 つの要素並びに江本があげる要因などを参考にしながら、本学の学生への支援並びに指導について考えてみる。

第一に、日常における講義や演習、実習等には目標が設定されている。それらの目標について、その講義や演習の内容や特徴に基づいて、より具体的に自分なりの目標を設定できるような場を設けることによって、講義や演習、実習等に取り組む学生の課題意識が高まると考える。

第二に、講義や実習等での学びの過程の重要性を意識することである。学びの過程には、成功体験もあれば失敗体験もある。どちらの体験にしても、自らの取組を振り返り、既習事項の活用や考え方や価値観について、何が十分で、何が不十分かを認識できるような場を持てるようにすることである。特に失敗体験については、自分をもうひとりの自分でモニタリングできる力が、その後の取組を改善へと導く。実習等では生活経験の違いや身に付けてきたマナー等によって、失敗することがある。その失敗によって、新たな考え方や価値観に出会い、社会の厳しさを味わう。学生が実習等で失敗し目標を失い、進路変更を考えることがあるが、その様なときに、自らの能力がどのような職種に適しているかについてじっくりと考える機会を持てるようにすることが重要である。(学生 I) のレポートの後半部分にあるように「失敗は成功までのプロセスであり、この二つは直線でつながっていると捉えることが必要なのである」という表現が、このことを象徴している。

(学生 E) が、「生き方を否定せずに内面の成長を図るために、成人までの大半を過ごす学校教育にできることは、挑戦と失敗、そして成功を体験する機会の提供なのではないだろうか」と提言している。さらに、「失敗を受容し解決策と一緒に模索できる環境や欠点を認めてくれる大人の存在」の重要性を指摘している。

第三に、複数の選択肢をもてるような考え方をできるようにすることである。めまぐるしく変わる現代社会にあって、様々な情報が氾濫している。それらの情報を収集しながら、自らの生き方を模索するに当たって「こうであらねばならない」とか「これしか道はない」と考えると、道を塞ぐことになる。昨今、SNS の発達により、どうしても他人の言動が気になり、他者が自分にはないものを発信していると自分を否定的に見てしまうことがある。自分の持っている能力は、他でも生かすことできるかもしれないという多様性が必要であり、自分の持ち味を大切にすることも必要である。

第四に、ゼミでの学生の学びの状況や意欲を感じ取りながら、学生に対して時機にあった適切な課題を提示するとともに、自由に試行錯誤しながら追究できるような環境を与える



ことである。自己効力感が高まる時期は、学生によって異なるが、多くの学生が教育実習や教育実践活動など、学校現場での活動を行うことによって意欲を高めている。ある学生は、その時期を次のように記している。

「実践活動で学校現場に行ったりボランティアに参加したりと将来へ向けての活動の幅が広がりました。それまで教師の仕事の大変さを理解しておらず軽い気持ちで目指してしまっていたのですが、ボランティアを通して子どもとかかわり、学校現場に赴く中で、教師という仕事の大変さを初めて目の当たりにしました。それと同時に、魅力ややりがいも感じました。」

次のように、ゼミでの活動を挙げた学生もいる。

「1つ目のポイントは、2年生で希望するゼミに入ったことです。ゼミでは、教育に関する本を読み、ゼミ生同士で意見を交流する場が多くありました。ゼミ生の意見を聞いていると、本をしっかりと読んで自分なりに解釈し考えているからこそ出てくる発言ばかりでした。そのような環境に身を置いていると自然と私も他のゼミ生に遅れないようにと思うようになり、課題の本を読んでは、気になった文章に線を引いたり付箋を貼ったりしました。そして、印を付けた文章を踏まえて「自分はこう思う」という意見をまとめてからゼミに臨むようにしていました。今振り返ると、ここまで成長することができたのはそのゼミに入っただからだと思います。2つ目のポイントは小学校の教育実習の時だと思います。実際に授業をした時に、目の前にいる大勢の児童にきちんと教えなくてはという使命感にかられました。また、4週間という限られた時間の中で多くのことを先生方から学ぼうと疑問に思ったことは積極的に質問したり、授業を参観させてもらったときには先生と児童の様子をよく観察し、気づいたことはすぐメモをしたりしました。大学での講義も、実習前はどちらかというと受け身で講義を受けていたことが多かったのですが、実習後は「自分だったらどう指導するだろう」と考えるようになり、講義への取り組み方も変わってきたように感じます。」

このように、学生は2年生からのゼミでの活動や教育実習、福祉大学が早くから開講している教育実践活動などの体験的な活動から意欲を高めていることがわかる。

これまで挙げた「学生が自らおこなう目標設定」「プロセス重視の学び」「複数の選択肢を持てるような環境」「時機にあった適切な指導と支援」を重視したような場を設定することによって、学生の「自分ならできる」というような自己効力感が高まり、大学での学びが広がり、深まっていくものと考えられる。繰り返しになるが、学びの結果よりも学びの過程を振り返り、その過程を大切にする姿勢を身に付けさせたいものである。

## 6 最後に

冒頭に記したように、本学の学生は第一志望で入学した割合は半数ほどである。自らの受験を振り返ると、決して満足しているわけではない。それに対して、入学後の学生の意識は、「入学して良かった」という割合が高くなっている。自分の選択と決定を肯定的に捉える傾向があるという傾向を鑑みたととしても、学生の満足度は高いと言える。このようになってい

る要因は、本学の教職員の日常における指導と支援が、学生の自己効力感を高めているもの  
と考える。

アルバート・バンデューラが説く4つの要素のうち、特にポジティブな言葉を学生に投げ  
かける「言語的説得」や先輩の活動の様子を紹介する機会を数多く設定し、「代理経験」が  
できるようにしていることも挙げられる。このことは、(学生A)のレポートの冒頭部分にあ  
る「今となってはたくさんの人に支えられ大学生活に満足しています」という表現がこのこ  
とを物語っている。

さらに、4の福祉大への満足度の項で記したように、福祉大のよさとして「友人が優しい」  
「教育学部や先生方のサポートが充実している」と自由記述をしている学生の割合も2  
0%～25%程度となっていることにも現れている。入学後の友人や教職員との関係づく  
りにおいても、満足度が高いことが言える。

教育学部の卒業生の約70%が教員採用試験を受験し、そのうちの約55%が合格し、教  
員となり、講師なども含めると相当数の学生が教職に就いている。このような現状を踏まえ  
て、学生が進路希望を実現できるような支援や指導の充実が今後益々求められる。教員採用  
試験の受験者数の減少に伴い、民間に就職する学生の割合も高くなっていくことが予想さ  
れる中で、その様な学生へのキャリアサポートも必要となってくる。卒業後の社会人生活の  
充実のためには、大学における講義や演習・実習を通して、失敗や成功にかかわらず、「過  
程」を大切にし、「自己効力感」を高められるような機会を持てるようにすることが重要で  
あると考える。

#### 【引用・参考文献】

- 坂野雄二・東條光彦「一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み」昭和61年、行動  
療法研究
- 江本リナ「自己効力感の概念」日本看護科学会誌、2000年
- 外山滋比古著「傷のあるリンゴ」2012年、東京書籍
- 祐宗省三・原野源三郎・柏木恵子・春木豊編編者「新装版 社会的学習理論の新展開」  
金子書房、2019年

【参考資料】

生徒指導・進路指導論資料

2022\_07\_14

進路にかかわるアンケート

※該当する項目について（ ）の中に○を付けてください。

学籍番号（ ） 氏名（ ）

- 1 東北福祉大学は第一志望でしたか？  
はい（ ） いいえ（第一志望大学 ）
- 2 大学受験は、自分の思うとおりにできましたか？  
はい（ ） いいえ（ ）
- 3 2で「いいえ」と答えた人は、その理由を記してください  
○→
- 4 東北福祉大学の受験を決めた主な理由を挙げてください（複数回答可）  
○→
- 5 東北福祉大学に入学して学んできたことは、現在の生活にとっても役だっていますか？  
はい（ ） いいえ（ ）
- 6 5で「いいえ」と答えた人は、その理由を記してください。  
○→
- 7 入学時からこれまでの講義の中で、考え方や生き方に影響を与えた講義を挙げてください（複数回答可）
- 8 7で、影響を与えた主な理由はなんですか？  
○→
- 9 大学生活で、一番努力したことはなんですか？（複数回答可）  
○→
- 10 教員採用試験は受験しますか？  
はい（ ） いいえ（ ）
- 11 10で「いいえ」と答えた人は、どんな職業に就く予定ですか？  
○→
- 12 東北福祉大学に入学してよかったと思いますか？  
はい（ ） いいえ（ ）
- 13 12で「いいえ」と答えた人はその理由を記してください。  
○→
- 14 東北福祉大学に入学して、自分の正直な気持ちを話せる人（友人・先生・家族など）はいましたか？  
はい（ ） いいえ（ ）
- 15 後輩や高校生に東北福祉大学のよさは何かと聞かれたら、どんなことを話しますか？（複数回答可）  
○→
- 16 大学での学びで一番大切なことは何だと思いますか？（複数回答可）  
○→
- 17 コロナ禍になり、自分の学びに変化がありましたか？  
はい（ ） いいえ（ ）
- 18 17で「はい」と答えた人は、変化について簡潔に記してください（項目だけでも可）  
○→
- 19 これから社会に出て、いろいろなこと（仕事など）をやりながら生きていく上で、何を大切に生きていきますか？（複数回答可）  
○→
- 20 いま、自分が最も大切にしていること（物）は何ですか？  
○→